



おのづから然り

NO.45

宮尾 彰

職務で市内の子育て支援センターを訪ねた日、ちようど月に一度の「音楽遊び」が行われていました。

ホール中央で、婦人の音楽療法士がキーボードの伴奏に合わせて、足踏みをしながら歌います。やがて、あちこちでぬいぐるみを抱いたり絵本を読んだりしていたお母さんと幼児たちは、大きなひとつの輪になりました。

『大きな栗の木の下で』の行進に始まり『お花が笑った』のパネルシアターで終る一連のプログラムは、居合わせた誰をも疎外することなく、その場にゆつたりとした流れを創り出しているのです。

忘れ難いお話をお聴きしたのは、その後スタッフとお茶を一緒にした時のことです。

このセッションのように、最も力の弱い存在を真ん中にして成り立っている市民の輪があります。それが、今から八年前に岡山県倉敷市で始められ、各地に広がりを見せている『ぶれジョブ』という活動です。

障害を持つ子どもたちに週一回一時間、自分が生活する地域の企業で小さな職業体験の機会が提供されます。

主役は希望する子どもたち。家から送り出すのは家族。現場に付き添うのは地域住民。彼らを受け容れるのは地元企業。彼らと仕事を組み合わせるのは学校の先生。

いかなる制度にも頼らずに、参加者の無償の行為のみで支えられる「利益によらないつながり」です。

彼らを福祉サービスの対象（object）としないがゆえに、あの「支援する／支援される」という二項対置の枠組みにとらわれることもありません。子どもたちを囲んで定例会を重ねる内に、周りの大人が変えられてゆくそうです。

半年続けてお互いに慣れ親しんだ頃、彼らは小さな別離を経験して、新たな出会いへと歩みを進めます。

発案者の西幸代さんは、ぶれジョブではお互いの立場に「手放す」「任せる」という姿勢が必要だと言われます。

貨幣的交換価値に支配される以前は、こうした大らかな信頼関係が地域社会に具えられていたのでしょうか。



特別支援学校や障害児施設でセッションをする際、軽度

のお子さんには各自で好きな楽器を選ばせ、選べない相手には彼女がその子に即した楽器を与えるのだそうです。

特に重症心身障害児と呼ばれ、自力ではほとんど身体を動かすことのできないお子さんのためには、微弱な動きで音の出るような楽器が配慮されているのです。

自分のパートを自覚して動ける子。傍らの介添えでわずかに身体の一部を動かすだけの子。理解力や能力に違いのある参加者が、全員でひとつの音楽を奏でます。

そんな時、音の流れの中で、重度のお子さんの出す音がまったく無作為かつ唐突に大きく響くことがある、そして実にその音こそが、演奏全体の「通奏低音」を成しているというのです。

決して他の夏とは並ばない夏が、もうすぐ終わります。

「核の平和利用」という言葉のまやかしが露呈された今、広島・長崎を記念する意味も、明らかに変容しました。

海の向うでは「ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ」と続く「ヒバクシャ」の歴史が、人々の記憶に刻まれています。

日本では、本当に何が起きているのかも公表せぬまま、戦後の経済的復興をモデルに「大震災からの復興」を叫ぶ声だけが喧しく響いています。取り返しのつかない事態の渦中に身を置きながらも、私たちはいまだに利潤と効率を追求する社会構造から抜け出すことができません。

セッションの中心でかけがえのない通奏低音を奏でる子。ぶれジョブの中心で地域の大人同士を結び付ける子。

彼らのおのづから然りなる姿が、その弱さと傷つき易さを透して、私たちの採るべき道を示しています。